

日本語教師の話し合い

——話し合いを阻害する要素に
焦点をあてて

博士後期課程一年 冷俊俊

教師の成長には教師間の協働的な学びが重要である。話し合いは教師間が協働的に学び合うために有効な手段だと言われている（池田等、2007）。本発表は協働的な学び合いの観点から、話し合いの実態を分析し、問題点をはつきりしたものである。

分析対象はA～Fの6名の教師が各自担当教師となった際の教案検討会議の録音データである。FOCUSの発信源と発信先（S/T）、発話の目的（Move）の2つの観点から分析を行う。

まず、各教師の発話量に注目して分析を行った。A～Fの6名の教師が担当教師となる授業の教案検討会議における各教師の発話をMove typeによって集計した結果、初任教師E、Fは他の教師の教案検討会議において、発話回数が最も少ないことがわかった。また、他の担当教師は自身の教案検討会議において、発話回数が最も多いのに対し、E、Fはそうでないことがわかった。ここから、初任教師E、Fは積極的に話し合いに参加していない可能性が高いことがわかる。

次に、各教師の促し（soi）に注目して分析を行った。いずれの教案検討会議においても、AもしくはBのsoi数が最も多いこ

とがわかった。また、soi数が最も少ないのはEもしくはFである。加えて、EとFは自身の教案検討会議中でのsoi数が他の教案検討会議の担当教師のsoi数より少ない傾向もみられた。つまり、A、Bは、常に積極的に他の教師の発話行動を促す側で、E、Fは他の教師の行動を促す行為が少なく、促される側にいることがわかる。

また、E、Fと他の教師のやりとり注目して分析を行った。6回の教案検討会議を分析したところ、E、Fの教案検討会議だけ、担当教師であるE、Fが複数他者から連続的に質問を受けている様子が浮かび上がった。それにより、初任教師E、Fは自信を無くしたり、「多対一」の状態になり、プレッシャーを感じたり、質問に答える以外の余裕がなかったりする可能性がある。

本発表では初任教師を含む日本語教師の話し合いに焦点をあて、初任教師であるE、Fは発話が少ないことがわかった。しかし、協働的な学び合いには、話し合いを「積極的に参加すること」（丸野、2012）、「互いを認め合い、支え合う」（寺谷、1999）、対等に意見を交換しあう（池田、2007）ことが必要である。よって、初任教師であるE、Fの発話回数が少ないことは大きな問題点として挙げられる。また、E、Fが受け身的に話し合いに参加していることや、複数の教師が連続的にE、Fに質問することは話し合いを阻害する可能性が高く、問題点として挙げられる。

しかし、教師全員が話し合いに参加していない回もあるため、データの分析に影響を及ぼす可能性があり、課題が残った。今後、研究の範囲を拡大し、研究を進めていきたい。